

坂口安吾

日本文化私観





# 日本文化私観



一 「日本的」ということ

僕は日本の古代文化についてほとんど知識を持っていない。ブルーノ・タウトが絶讃する桂離宮も見たことがなく、玉泉も大雅堂も竹田も鉄斎も知らないのである。いわんや、秦蔵六だの竹源斎師など名前すら聞いたことがなく、第一、めったに旅行することがないので、祖国のあの町この村も、風俗も、山河も知らないのだ。タウ

トによれば日本における最も俗悪な都市だという新潟市に僕は生れ、彼の蔑<sup>さげす</sup>み嫌うところの上野から銀座への街、ネオン・サインを僕は愛す。茶の湯の方式など全然知らない代りには、猥<sup>みだ</sup>りに酔い痴<sup>し</sup>れることをのみ知り、孤独の家居にいて、床の間などというものに一顧を与えたこともない。

けれども、そのような僕の生活が、祖国の光輝ある古代文化の伝統を見失ったという理由で、貧困なものだとは考えていない（しかし、ほかの理由で、貧困だという内省には悩まされているのだが――）。

タウトはある日、竹田の愛好家というさる日本の富豪の招待を受けた。客は十名余りであつた。主人は女中の手をかりず、自分で倉庫と座敷の間を往復し、一幅いっぶくずつの掛物を持参して床の間へ吊しつる一同に披露して、又、別の掛物をとりに行く、名画が一同を楽しませることを自分の喜びとしているのである。終わって、座を変え、茶の湯と、礼儀正しい食膳を供したという。こういう生活が「古代文化の伝統を見失わない」ために、内面的に豊かな生活だと言うに至っては、内面なるものの目安が余り安直でめちやくちやな話だけでも、しかし、無論、

文化の伝統を見失った僕の方が（そのために）豊富であるはずもない。

いつかコクトオが、日本へ来たとき、日本人がどうして和服を着ないのだろうと言って、日本が母国の伝統を忘れ、欧米化に汲々たるありさまを嘆いたのであった。なるほど、フランスという国は不思議な国である。戦争が始ると、まずまっさきに避難したのはルーヴル博物館の陳列品と金塊で、パリの保存のために祖国の運命を換えてしまった。彼らは伝統の遺産を受け継いできたが、祖国の伝統を生むべきものが、又、彼ら自身にほかなら



ぬことを全然知らないようである。

伝統とは何か？ 国民性とは何か？ 日本人には必然の性格があつて、どうしても和服を発明し、それを着なければならぬような決定的な素因があるのだろうか。

講談を読むと、我々の祖先ははなはだ復讐心が強く、乞食となり、草の根を分けて仇を探し廻っている。そのサムライが終わってからまだ七八十年しか経たないのに、これはもう、我々にとっては夢の中の物語である。今日の日本人は、およそそ、あらゆる国民の中で、恐らく最も憎悪心のすくない国民の中の一つである。僕がまだ

学生時代の話であるが、アテネ・フランセでロベール先生の歓迎会があり、テーブルには名札が置かれ席が定まっていた、どういうわけだか僕だけ外国人の間にはさまれ、真正面はコット先生であつた。コット先生は菜食主義者だから、たった一人献立が別で、オートミルのようなものばかり食っている。僕は相手がなくて退屈だから、先生の食欲ばかりもっぱら観察していたが、猛烈な速力で、一度匙さじをとりあげると口と皿の間を快速力で往復させ食べ終わるまで下へ置かず、僕が肉を一きれ食ううちに、オートミルを一皿すすり込んでしまう。先生が胃弱

になるのはもつともだと思った。テーブルスピーチが始った。コット先生が立上った。と、先生の声は沈痛なもので、突然、クレマンソーの追悼演説ついでとうを始めたのである。クレマンソーは前大戦のフランスの首相、虎とよばれた決闘好きの政治家だが、ちようどその日の新聞に彼の死去が報ぜられたのであった。コット先生はボルテール流のニヒリストで、無神論者であった。エレジヤの詩を最も愛し、好んでボルテールのエピグラムを学生に教え、また、みずから好んで誦よむ。だから先生が人の死について思想を通したものでない直接の感傷で語ろうなどと

は、僕は夢にも思わなかつた。僕は先生の演説が冗談だと思つた。今に一度にひっくり返すユーモアが用意されていゝのだらうと考えたのだ。けれども先生の演説は、沈痛から悲痛になり、もはや冗談ではないことがハツキリ分つたのである。あんまり思いもよらないことだつたので、僕は呆氣あつけにとられ、思わず、笑いだしてしまつた。

——その時の先生の眼を僕は生涯忘れることができない。先生は、殺してもなおあきたりぬ血に飢えた憎悪を凝らして、僕を睨にらんだのだ。

このような眼は日本人には無いのである。僕は一度も

このような眼を日本人に見たことはなかった。その後も特に意識して注意したが、一度も出会ったことがない。つまり、このような憎悪が、日本人には無いのである。

「三国志」における憎悪、「チャタレイ夫人の恋人」における憎悪、血に飢え、八ツ裂きにしてもなおあき足りぬという憎しみは日本人にはほとんどない。昨日の敵は今日の友という甘さが、むしろ日本人に共有の感情だ。およそ仇討ちにふさわしくない自分たちであることを、おそらく多くの日本人が痛感しているに相違ない。長年月にわたって徹底的に憎み通すことすら不可能にちか

く、せいぜい「食いつきそうな」眼つきぐらいが限界なのである。

伝統とか、国民性とよばれるものにも、時として、このような欺瞞ぎまんが隠されている。およそ自分の性情にうらはらな習慣や伝統を、あたかも生来の希願のように背負わなければならぬのである。だから、昔日本に行われていたことが、昔行われていたために、日本本来のものだということとは成り立たない。外国において行われ、日本には行われていなかった習慣が実は日本人にふさわしいこともあり得るのだ。模倣ではなく、発見だ。ゲータ

がシエクスピアの作品に暗示を受けて自分の傑作を書きあげたように、個性を尊重する芸術においてすら、模倣から発見への過程は最もしばしば行われる。インスピレーションは、多く模倣の精神から出発して、発見によって結実する。

キモノとは何ぞや？ 洋服との交流が千年ばかり遅かったただけだ。そうして、限られた手法以外に、新たな発見を暗示する別の手法が与えられなかっただけである。日本人の貧弱な体軀たいくが特にキモノを生みだしたのではない。日本人にはキモノのみが美しいわけでもない。外国

の恰幅かつぶくのよい男たちの和服姿が、我々よりも立派に見えるにきまっている。

小学生のころ、万代橋というしなのがわ信濃川の河口にかかっている木橋がとりこわされて、川幅を半分に埋めたて鉄橋にするというので、長い期間、悲しい思いをしたことがあった。日本一の木橋がなくなり、川幅が狭くなって、自分の誇りがなくなることが、身を切られる切なさであったのだ。その不思議な悲しみ方が今では夢のような思い出だ。このような悲しみ方は、成人するにつれ、また、その物との交渉が成人につれて深まりながら、かえって



薄れる一方であった。そうして、今では、木橋が鉄橋に代り、川幅の狭められたことが、悲しくないばかりか、きわめて当然だと考える。しかし、このような変化は、僕のみではないだろう。多くの日本人は、故郷の古い姿が破壊されて、欧米風な建物が出現するたびに、悲しみよりも、むしろ喜びを感じる。新しい交通機関も必要だし、エレベーターも必要だ。伝統の美だの日本本来の姿などというものよりも、より便利な生活が必要なのである。京都の寺や奈良の仏像が全滅しても困らないが、電車が動かなくては困るのだ。我々にたいせつなのは「生

活の必要」だけで、古代文化が全滅しても、生活は亡びず、生活自体が亡びないかぎり、我々の独自性は健康なのである。なぜなら、我々自体の必要と、必要に応じた欲求を失わないからである。

タウトが東京で講演の時、聴衆の八、九割は学生で、あとの一、二割が建築家であったそうだ。東京のあらゆる建築専門家に案内状を発送して、なおそのような結果であった。ヨーロッパでは決してこのようなことはあり得ないそうだ。常に八、九割が建築家で、一、二割が都市の文化に関心を持つ市長とか町長という名誉職の人々

であり、学生などの割りこむ余地はないはずだ、と言うのである。

僕は建築界のことについては不案内だが、例を文学にとつて考えても、たとえばアンドレ・ジツドの講演が東京で行われたにしても、小説家の九割ぐらいは聴きに行きはしないだろう。そうして、やはり、聴衆の八、九割は学生で、おまけに、学生の三割ぐらいは、女学生かもしれないのだ。僕が仏教科の生徒のころ、フランスだのイギリスの仏教学者の講演会に行ってみると、坊主だらけの日本のくせに、聴衆の全部が学生だった。もっとも

坊主の卵なのだろう。

日本の文化人の怠慢なのかも知れないが、西洋の文化人が「社交的に」勤勉なせいでもあるのだろう。社交的に勤勉なのは必ずしも勤勉ではなく、社交的に怠慢なのは必ずしも怠慢ではない。勤勉、怠慢はとにかくとして、日本の文化人はまったく困った代物だ。しろもの桂離宮も見たことがなく、竹田も玉泉も鉄斎も知らず、茶の湯も知らない。小堀遠州などと言えば、建築家だか、造庭家だか、大名だか、茶人だか、もしかすると忍術使いの家元じやなかつたかね、などと言う奴がある。故郷の古い建築を叩たた

き毀こわして、でき損そこないの洋式バラックをたてて、得々と  
 している。そのくせ、タウトの講演も、アンドレ・ジッ  
 ドの講演も聴きに行きはしないのである。そうして、ネ  
 オン・サインの陰を酔っ払ってよろめきまわり、電髪嬢  
 を肴さかなにしてインチキ・ウイスキーを呷あおっている。呆あきれ  
 果てた奴らである。

日本本来の伝統に認識も持たないばかりか、その欧米  
 の猿真似に至っては体たいをなさず、美の片鱗へんりんをとどめず、  
 全然インチキそのものである。ゲーリー・クーパーは満  
 員客止めの盛況だが、梅若万三郎は数える程しか客が来

ない。かかる文化人というものは、貧困そのものではないか。

しかしながら、タウトが日本を発見し、その伝統の美を発見したことと、我々が日本の伝統を見失いながら、しかも現に日本人であることとの間には、タウトが全然思いもよらぬへだた距りがあった。すなわち、タウトは日本を発見しなければならなかったが、我々は日本を発見するまでもなく、現に日本人なのだ。我々は古代文化を見失っているかも知れぬが、日本を見失うはずはない。日本精神とは何ぞや、そういうことを我々自身が論じる必

要はないのである。説明づけられた精神から日本が生れるはずもなく、また、日本精神というものが説明づけられるはずもない。日本人の生活が健康でありさえすれば、日本そのものが健康だ。彎わんきよく曲した短い足にズボンをはき、洋服をきて、チヨコチヨコ歩き、ダンスを踊り、畳をすてて、安物の椅子テーブルにふんぞり返って気取っている。それが欧米人の眼から見て滑稽こっけい千万であることと、我々自身がその便利に満足していることの間には、全然つながりがないのである。彼らが我々を憐れあわみ笑う立場と、我々が生活しつつある立場には、根柢的に相違

がある。我々の生活が正当な要求にもとづくかぎりは、  
彼らの憫びんしょう笑がはなはだ浅薄でしかないのである。彎曲  
した短い足にズボンをはいてチヨコチヨコ歩くのが滑稽  
だから笑うというのは無理がないが、我々がそういう所  
にこだわりの持たず、もう少し高い所に目的を置いてい  
たとしたら、笑う方が必ずしも利巧のはずはないではな  
いか。

僕は先刻白状に及んだとおり、桂離宮も見たことがな  
く、雪舟も雪村も竹田も大雅堂も玉泉も鉄斎も知らず、  
狩野派かののも運慶も知らない。けれども、僕自身の「日本文



化私観」を語ってみようと思うのだ。祖国の伝統を全然知らず、ネオン・サインとジャズぐらいしか知らない奴が、日本文化を語るとは不思議なことかもしれないが、すくなくとも、僕は日本を「発見」する必要だけはなかったのだ。

## 二 俗悪について（人間は人間を）

昭和十二年の初冬から翌年の初夏まで、僕は京都に住

んでいた。京都へ行つてどうしようという目当もなく、書きかけの長篇小説と千枚の原稿用紙の外にはタオルや歯ブラシすら持たないといういでたちで、とにかくおき隠岐和一を訪ね、部屋でも探してもらつて、孤独の中で小説を書きあげるつもりであつた。まったく、思いだしてみると、孤独ということがただ一筋に、なつかしかったようである。

隠岐は僕に京都で何が見たいかということと、食物では何が好きかということを、最もさりげない世間話の中へ織り込んで尋ねた。僕は東京でザツクバランにつきあ

っていた友情だけしか期待していなかったのに、京都の  
隠岐は東京の隠岐ではなく、客人をもてなすために最も  
細心な注意を払う古都のぼんぼんに変っていた。僕は  
祇園ぎおんの舞妓まいこと猪いのししだとウツカリ答えてしまったのだ  
が——まったくウツカリ答えたのである。なぜなら、出  
発の晩、京都行きの送別の意味で尾崎士郎に案内され始  
めて猪を食ったばかりで、もののハズミでウツカリ言っ  
てしまったけれども、第一、猪の肉というものが手軽に  
入手できようなどとは考えていないせいでもあった。と  
ころが、その翌日から毎晩毎晩猪に攻められ、おまけに、

猪の味覚が全然僕の嗜好しこうに当てはまるものではないことが、三日めぐらいに決定的に分つたのである。けれども、我慢して食べなければならなかった。そうして、一方舞妓の方は、京都へ着いたその当夜、さっそく花見小路のお茶屋に案内されて行ったのだが、そのころ、祇園に三十六人だか七人だかの舞妓がいるということだったが、酔眼朦朧もうろうたる眼前へ二十人ぐらいの舞妓たちが次から次へと現われた時には、いささか天命と諦あきららめて観念の眼を閉じる気持になったほどである。

僕は舞妓の半分以上を見たわけだったが、これぐらい

馬鹿らしい存在はめったにない。特別の教養を仕込まれて  
いるのかと思っていたら、そんなものは微塵みじんもなく、  
踊りも中途半端だし、ターキーとオリエの話ぐらいしか  
知らないのだ。それなら、愛玩用の無邪気な色気がある  
のかというとコマツチャクレているばかりで、清潔な色  
気などは全くなかった。もともと、愛玩用につくりあげ  
られた存在にきまっているが、子供を条件にして子供の  
美德がないのである。羞恥しゆうちがなければ、子供はゼロだ。  
子供にして子供にあらざる以上、大小を兼ねた中間的な  
色っぽさがあるかというのと、それもない。広東カントンに盲妹もうまいと

いう芸者があるということだが、盲妹というのは、顔立の綺麗な女子を小さいうちに盲にして特別の教養、踊りや音楽などを仕込むのだそうである。中国人のやることは、あくどいが、徹底している。どうせ愛玩用として人工的につくりあげるつもりなら、これもよかろう。盲にするとは凝った話だ。ちと、あくどいが、不思議な色気が、考えてみても、感じられる。舞妓ははなはだ人工的な加工品に見えながら、人工の妙味がないのである。娘にして娘の羞恥がない以上、自然の妙味もないのである。

僕たちは五六名の舞妓を伴って東山ダンスホールへ行

った。深夜の十二時に近い時刻であつた。舞妓の一人が、そのこのダンサーに好きなのがいるのだそうで、その人と踊りたいと言いだしたからだ。ダンスホールは東山の中腹にあつて、人里を離れ、東京の踊り場よりはるかに綺麗だ。満員の盛況だったが、このとき僕が驚いたのは、座敷でベチャクチャしゃべっていたり踊っていたりしたのではいっそうに見栄えのしなかつた舞妓たちが、ダンスホールの群集にまじると、群を押し、堂々と光彩を放つて目立つのである。つまり、舞妓の独特のキモノ、だらりの帯が、洋服の男を押し、夜会服の踊り子を押し、

西洋人もてんで見栄えがしなくなる。なるほど、伝統あるものには独自の威力があるものだ、と、いささか感服したのであつた。

同じことは、相撲すもうを見るたびに、いつも感じた。呼出よびだし

につづいて行司の名乗り、それから力士が一礼しあつて、四股しこをふみ、水をつけ、塩を悠々ゆうゆうとまきちらして、仕切りにかかる。仕切り直して、ややしばらく睨み合い、悠々と塩をつかんでくるのである。土俵の上の力士たちは国技館を圧倒している。数万の見物人も、国技館の大建築も、土俵の上の力士たちに比べれば、あまりに小さく貧



弱である。

これを野球に比べてみると、二つの相違がハッキリする。なんとというグラウンドの広さであろうか。九人の選手がグラウンドの広さに圧倒され、追いまくられ、数万の観衆に比べて気の毒なほど無力に見える。グラウンドの広さに比べると、選手を草薙人夫に見立ててもいいぐらい貧弱に見え、プレーをしているのではなく、息せききつて追いまくられた感じである。いつかベーブ・ルースの一行を見た時には、さすがに違った感じであった。板についたスタンド・プレーは場を押し、グラウンドの広さが目

立たないのである。グラウンドを圧倒しきれなくとも、グラウンドと対等ではあった。

別に身体のせいではない。力士といえども大男ばかりではないのだ。また、必ずしも、技術のせいでもないだろう。いわば、伝統の貫禄だ。それあるがために、土俵を押し、国技館の大建築を押し、数万の観衆を押ししている。しかしながら、伝統の貫禄だけでは、永遠の生命を維持することはできないのだ。舞妓のキモノがダンスホールを圧倒し、力士の儀礼が国技館を圧倒しても、伝統の貫禄だけで、舞妓や力士が永遠の生命を維持するわけ

にはゆかない。貫禄を維持するだけの実質がなければ、やがては亡びるほかに仕方がない。問題は、伝統や貫禄ではなく、実質だ。

伏見に部屋を見つけるまで、隠岐の別宅に三週間ぐらい泊っていたが、隠岐の別宅は嵯峨さがにあつて、京都の空は晴れていても、愛宕山あたごやまが雪をよび、このあたりでは毎日雪がちらつくのだった。隠岐の別宅から三十間ぐらいの所に、不思議な神社があつた。車折神社くるまぢきというのだが、清原のなにがしというたぶん学者らしい人を祀まつつて

いるくせに、非常に露骨な金儲けもうの神様なのである。社殿の前に柵さくをめぐらした場所があつて、この中に円みを帯びた数万の小石が山を成している。自分の欲しい金額と姓名生年月日などを小石に書いて、ここへ納め、願をかけるのだそうである。五万円というものもあるし、三〇円ぐらいの悲しいような石もあつて、まれには、月給がいくらボーナスがいくら昇給するようにと詳細に数字を書いた石もあつた。節分の夜、燃え残った神火トンドの明りで、この石を手執りあげて一つ一つ読んでいたが、旅先の、それも天下に定まる家もなく、一管のペンに一生

を托してともすれば崩れがちな自信と戦っている身には、氣持のいい石ではなかった。牧野信一は奇妙な人で、神社仏閣の前を素通りすることのできない人であった。必ずうやうやしく拝礼し、ジャランジャランと大きな鈴をならす綱がぶらさがっていれば、それを鳴らし、お賽銭さいせんをあげて、しばらくめいもく瞑目最敬礼する。お寺が何宗であるかと変りはない。非常なはにかみ屋で、人前で目立つような些少さししょうの行為も最もやりたがらぬ人だったのに、これだけは例外で、どうにも、やむを得ないという風だった。いつか息子の英雄君をつれて散歩のついで僕の所へ立寄

つて三人で池上本門寺いけがみほんもんじへ行くと、英雄君をうながして本堂の前へすすみ、お賽銭をあげさせて親子二人うやうやしく拝礼していたが、得体の知れぬ悲願を血につなごうとしているようで、痛々しかった。

節分の火にてらして読んだあの石この石。もとより、そのような感傷や感動が深いものであるはずはなく、また、激しいものであるはずもない。けれども、今も、ありありと覚えている。そうして、毎日竹藪たけやぶに雪の降る日々、嵯峨や嵐山の寺々をめぐり、清滝の奥や小倉山おぐらやまの墓地の奥まであて踏みめぐったが、天龍寺も大覚寺

も何か空虚な冷めたさをむしろ不快に思ったばかりで、  
いっこうに記憶に残らぬ。

車折神社の真裏に嵐山劇場という名前だけは確かなものだが、ひどくうらぶれた小屋があった。劇場のまわりは畑で、家がポツポツ点在するばかり。劇場前の暮れ方の街道をカラの牛車に酔っ払った百姓がねむり、牛が勝手に歩いて通る。僕が京都へつき、隠岐の別宅を探して自動車の運転手と二人でキョロキョロ歩いていると、電柱に嵐山劇場のビラがブラ下り、猫遊軒猫八とあって、贗物にせものだったら米五十俵進呈する、とある。もちろん、贗

のはずはない。東京の猫八は「江戸や」猫八だからである。

言うまでもなく、猫遊軒猫八を僕はさっそく見物に行った。おもしろかった。猫遊軒猫八は実に腕力の強そうな人相の悪い大男で、物真似ばかりでなくいつさいの芸を知らないのである。和服の女が突然キモノを尻までまくりあげる踊りなどいろいとあって、いちばんおしまいに猫八が現われる。現われたところは堂々たるもの、立派な袴かみしもをつけ、テーブルには豪華な幕をかけて、雲月うんげつの幕にもひけをとらない。そうして、喧嘩けんかしたい奴は遠



慮なく来てくれという意味らしい不思議な微笑で見物人を見渡しながら、汝らよく見物に来てくれた、おもしろかったであろう。また、明晩もいつそうたくさんの知りあいを連れて見においで、という意味のことをしやべつて、終わりとなるのである。何がためにテーブルに堂々たる幕をかけ、袴をつけて現われたのか。真にユニツクな芸人であった。

旅芸人の群は大概一日、長くて三日の興行であった。そうして、それらの旅芸人は猫八のように喧嘩の好きなものばかりではなかった。むしろ猫八が例外だった。僕

は変るたびに見物し、はなはだしきは同じ物を二度も三度も見にでかけたが、中には福井県の山中の農夫たちが、冬だけ一座を組織して巡業しているのもあり、漫才もやれば芝居も手品もやり、揃いも揃って言語道断に芸が下手で、座頭らしい唯一の老練な中老人がそれをひどく気にしながら、しかし、心底から一座の人々をいたわる様子が痛々しいような一行もあつた。十八ぐらいの綺麗な娘が一人いて、それで客をひく以外には手段がない。昼はこの娘にたった一人の付き添いをつけて人家よりも畑の多い道をねり歩き、漫才に芝居に踊りに、むやみに

娘を舞台に上げたが、これが、また、芸が未熟で、ますますもって痛々しい。僕はその翌日も見物にでかけたが、二日目は十五、六名しか観衆がなく、三日目の興行を切り上げて、次の町へ行ってしまった。その深夜、うどんを食いに劇場の裏を通ったら、木戸が開け放されていて、荷物を大八車につんでおり、座頭が路上でメザシを焼いていた。

嵐山の渡月橋とげつきょうを渡ると、茶店がズラリと立ち並び、春が人の出盛りだけれども、遊覧バスがここで中食をとることになっているので、とにかく冬も細々と営業してい

る。ある晩、隠岐と二人で散歩のついで、ここで酒をのもうと思つて、一軒一軒廻つたが、どこも燈あかりがなく、人の気配もない。ようやく、最後に、一軒みつけた。冬の夜、まぎれ込んでくる客なぞは金輪際こんりんざいないのだそうだ。四十ぐらいの温和なおかみさんと十九の女中がいて、火がないからというので、家族の居間で一つ火鉢にあたりながら酒をのんだが、女中が曲馬団の踊り子あがりで、突然、嵐山劇場のことをしやべりはじめた。嵐山劇場は常に客席の便所に小便が溢あふれ、臭気ふんぷん芬々たるものがあるのである。我々は用をたすに先立って、被害の最少の位

置を選定するに一苦勞しなければならぬ。小便の海をわた渉り歩いて小便壺まで辿りつかねばならぬような時もあった。客席の便所があのようにでは、樂屋の汚なさが思いやられる。どんなに汚いだろうかしら、と、女中は突然口走ったが、そこには激しい実感があつた。無邪気な娘であつた。曲馬団でいちばんつらかつたのは、冬になると、しょうゆ醤油を飲まなければならなかつたことだそうだ。醤油を飲むと身体が暖まるのだという。それで、裸体で舞台へ出るには、必ず醤油を飲まされる。これには降参したそうである。

僕は嵯峨では昼はもっぱら小説を書いた。夜になると、大概、嵐山劇場へ通った。京都の街も、神社仏閣も、名所旧蹟も、いっこうに心をそそらなかつた。嵐山劇場の小便くさい観覧席で、百名足らずの寒々とした見物人と、くだらぬ駄洒落だじやれに欠伸あくびまじりで笑っているのが、それで充分であつたのである。

そういう僕に隠岐がいささか手を焼いて、ひとつ、おどかしてやろうという気持になつたらしい。無理に僕をひっぱりだして（その日も雪が降っていた）汽車に乗り、保津川ほつがわをさかのぼり、丹波たんばの亀岡という所へ行つた。昔

の亀山のこととで、あけちみつひで明智光秀の居城のあった所である。その城跡に、おおもときよう大本教の豪壮な本部があったのだ。不敬罪に問われ、ダイナマイトで爆破された直後であった。僕たちは、それを見物にでかけたのである。

城跡は丘に壕ほりをめぐらし、上から下まで、空壕の中も、一面に、爆破した瓦が累々と崩れ重っている。茫々たる廃墟で一木一草をとどめず、さまよう犬の影すらもない。四周に板囲いをして、おまけに鉄条網のようなものを張りめぐらし、離れた所に見張所もあったが、ただこのために丹波路はるばる（でもないが）汽車に揺られて来た

のだから、あに豈目的を達せずんばあるべからずと、鉄条網を乗り越えて、わにさぶろう王仁三郎の夢の跡へ踏みこんだ。頂上に立つと、亀岡の町と、丹波の山々にかこまれた小さな平野が一望に見える。雪が激しくなり、廃墟の瓦につもりはじめていた。目星しいものは爆破の前に没収されて影をとどめず、ただ、頂上の瓦には成程金線の模様のはいつた瓦があつたり、酒樽ぐらいの石像の首が石段の上どころがっついていたり、王仁三郎に奉仕した三十何人かの妻たちがいたと思われる中腹のおびただしい小部屋のあたりに、中庭の若干の風景が残り、そこにも、いくつかの



石像が潰つぶれていた。とにかく、こくめいの上にもこくめいに叩き潰つぶされている。

再び鉄条網を乗り越えて、壕に沿うて街道を歩き、街のとば口の茶屋へ這はい入いって、保津川という清流の名にふさわしからぬ地酒をのんだが、そこへ一人の馬方が現われ、馬をつないで、これもまた保津川をのみはじめた。

馬方は仕事帰りに諸方で紙屑を買って帰る途中で、紙屑の儲けなど酒一本にも当らんわい、やくたいもないこつちや、などとボヤきながら、何本となく平げている、何か僕たちに話しかけたいというふうでいて、それがはな

はだ怖ろしくもあるという様子である。そのうちに酪酊めいていに及んで、話しかけてきたのであつたが、旦那方は東京から御出張どすか、と言う。いかにも、そうだ、と答えると、感に堪えて、五、六ぺんぐらいお辞儀をしながら唸うなっている。話すうちにわかつたのだが、僕たちを特に密令を帯びて出張した刑事だと思つたのである。隠岐は筒袖がいとうの外套がいとうに鳥打帽子、商家の放蕩ほうとう若旦那といういでたちであるし、僕はドテラの着流しにステッキをふりまわし、雪が降るのに外套も着ていない。異様な二人づれが禁制の地域から鉄条網を乗り越えて悠悠現われるのを見たも

のだから、怖い物見たさで、跡をつけて来たのであった。こう言われてみると、なるほど、見張の人まで、僕たちに遠慮していた。僕たちは一時間ぐらい廃墟をうろついていたが、見張の人は番所の前を掃いたりしながら、僕たちがそっちを向くと、慌あわてて振り向いて、見ないふりをしていたのである。僕たちは刑事になりすまして、大本教の潜伏信者の様子などを訊ねてみたが、馬方は泥酔しながらもにわかに関色蒼然となり、たちまち言葉も吃どもりはじめて、多少は知らないこともないけれども悪事を働いた覚えのない自分だから、それを訊きくのだけはなに

ぶんにも勘弁していただきたい、と取調室にいるように三拝九拝していた。

宇治の黄檗山おうぼくさん万福寺は隠元いんげんの創建にかかる寺だが、隠元によれば、寺院建築の要諦は莊嚴ということ、信者の俗心を高めるところの形式をととのえていなければならぬと言っていたそうである。また、人は飲食を共にすることによって交りが深くなるものだから、食事がたいせつであるとも言ったそうだ。なるほど、万福寺の齋堂さいどう（食堂）は堂々たるものであり、その普茶料理ふちやは天下に

名高いものである。もったも、食事と交際を結びつけてたいせつにするのは中国一般の風習だそうで、隠元に限られた思想ではないかもしれぬ。

建築の工学的なことについては、全然僕は知らないけれども、すくなくとも、寺院建築の特質は、まず、第一に、寺院は住宅ではないという事である。ここには、世俗の生活を暗示するものがないばかりか、つとめてその反対の生活、非世俗的な思想を表現することに注意が集中されている。それゆえ、また、世俗生活をそのまま宗教としても肯定する真宗の寺域がたちまち俗臭紛紛とす

るのも当然である。

しかしながら、真宗の寺（京都の両本願寺）は、古来孤独な思想を暗示してきた寺院建築の様式をそのままかりて、世俗生活を肯定する自家の思想に応用しようとしているから、落ち着きがなく、俗悪である。俗悪なるべきものが俗悪であるのはいっこうにさしつかえがないのだが、要は、ユニツクな俗悪ぶりが必要だということである。

京都という所は、寺だらけ、名所旧蹟だらけで、二、三町歩くごとに大きな寺域や神域に突き当る。一週間ぐ

らい滞在のつもりなら、目的をきめて歩くよりも、ただでたらめに足の向く方へ歩くのがいい。次から次へ由緒ゆいしよありげなものが現われ、いくらか心を惹ひかれたら、名前をきいたり、丁寧に見たりすればいい。狭い街だから、隅から隅まで歩いてても、大したことはない。僕は、そういうふうにして、時々、歩いた。深草から醍醐だいちご、小野の里、山科やましなへ通う峠の路も歩いたし、市街ときては、どこを歩いてても迷う心配のない街だから、伏見から歩きはじめて、夕方、北野の天神様にぶつかって慌てたことがあった。だが、僕が街へ出る時は、歓楽をもとめるためか、

孤独をもとめるためか、どちらかだ。そうして、そのよ  
うな散歩に寺域はたしかに適当だが、繁華な街で車をウ  
ロウロ避けるよりも落ち着きがあるという程度であつ  
た。

なるほど、寺院は、建築自体として孤独なものを暗示  
しようとしている。炊事の匂いだとか女房子供というも  
のを聯想させず、日常の心、俗な心とつながりを断とう  
とする意志がある。しかしながら、そういう観念を、建  
築の上においてどれほど具象化につとめてみても、観念  
自体に及ばざることにはるかに遠い。



日本の庭園、林泉は必ずしも自然の模倣ではないだろう。南画などに表現された孤独な思想や精神を林泉の上に現実的に表現しようとしたものらしい。茶室の建築だとか（寺院建築でも同じことだが）林泉というものは、いわば思想の表現で自然の模倣ではなく、自然の創造であり、用地の狭さというような限定は、つまり、絵におけるカンバスの限定と同じようなものである。

けれども、茫洋たる大海の孤独さや、沙漠の孤独さ、大森林や平原の孤独さについて考えるとき、林泉の孤独さなどというものが、いかにヒネくれてみたところで、

タカが知れていることを思い知らざるを得ない。

龍安寺の石庭が何を表現しようとしているか。いかなる観念を結びつけようとしているか。タウトは修学院離宮の書院の黒白の壁紙を絶讃し、滝の音の表現だと言っているが、こういう苦しい説明までして観賞のツジツマを合せなければならぬというのは、なさけない。けだし、林泉や茶室というものは、禅坊主の悟りと同じことで、禅的な仮説の上に建設された空中楼阁なのである。仏とは何ぞや、という。答えて、糞カキベラだという。庭に一つの石を置いて、これは糞カキベラでもあるが、

また、仏でもある、という。これは仏かも知れないというふうに見てくれればいいけれども、糞カキベラは糞カキベラだと見られたら、おしまいである。実際において、糞カキベラは糞カキベラでしかないという当たり前さには、禅的な約束以上の説得力があるからである。

龍安寺の石庭がどのような深い孤独やサビを表現し、深遠な禅機に通じていても構わない、石の配置がいかなる観念や思想に結びつくかも問題ではないのだ。要するに、我々が涯<sup>はて</sup>ない海の無限なる郷愁や沙漠の大いなる落日を思い、石庭の与える感動がそれに及ばざる時には、

遠慮なく石庭を黙殺すればいいのである。無限なる大洋や高原を庭の中に入れることが不可能だというのは意味をなさない。

芭蕉ばしやうは庭をでて、大自然のなかに自家の庭を見、また、つくった。彼の人生が旅を愛したばかりでなく、彼の俳句自体が、庭的なものを出て、大自然に庭をつくった、と言うことができる。その庭には、ただ一本の椎しいの木しかなかったり、ただ夏草のみがもえていたり、岩と、浸み入る蝉せみの声しかなかったりする。この庭には、意味をもたせた石だの曲りくねった松の木などなく、それ自体

が直接的な風景であるし、同時に、直接的な観念なのである。そうして、龍安寺の石庭よりは、よっほど美しいのだ。と言って、一本の椎の木や、夏草だけで、現実的に、同じ庭をつくることは全くできない相談である。

だから、庭や建築に「永遠なるもの」を作ることはできない相談だあきらいという諦めが、昔から、日本には、あった。建築は、やがて火事に焼けるから「永遠ではない」という意味ではない。建築は火に焼けるし人はやがて死ぬから人生水の泡のごときものだというのは「方丈記」の思想で、タウトは「方丈記」を愛したが、実際、タウ

トという人の思想はその程度のものでしかなかつた。しかしながら、芭蕉の庭を現実的には作り得ないという諦め、人工の限度に対する絶望から、家だの庭だの調度だのというものには全然顧慮しないという生活態度は、特に日本の実質的な精神生活者には愛用されたのである。大雅堂は画室を持たなかつたし、良寛には寺すらも必要ではなかつた。とはいえ、彼らは貧困に甘んじることがもつて生活の本領としたのではない。むしろ、彼らは、その精神において、あまりにも欲が深すぎ、豪奢ごうしやでありすぎ、貴族的でありすぎたのだ。すなわち、画室や寺が

彼らに無意味なのではなく、その絶対のものがあり得ないという立場から、中途半端を排撃し、無きに如<sup>し</sup>かざるの清潔を選んだのだ。

茶室は簡素をもつて本領とする。しかしながら、無きに如かざる精神の所産ではないのである。無きに如かざるの精神にとっては、特に払われたいっさいの注意が、不潔であり饒<sup>じょうぜつ</sup>舌である。床の間がいかに自然の素朴さを装うにしても、そのために支払われた注意が、すでに、無きに如かざるの物である。

無きに如かざるの精神にとっては、簡素なる茶室も日

光の東照宮も、共に同一の「有」の所産であり、詮せんずれば同じ穴の貉むじななのである。この精神から眺むれば、桂離宮が単純、高尚であり、東照宮が俗悪だという区別はない。どちらも共に饒舌であり、「精神の貴族」の永遠の觀賞には堪えられぬ普請ふしんなのである。

しかしながら、無きに如かざるの冷酷なる批評精神は存在しても、無きに如かざるの芸術というものは存在することできない。存在しない芸術などがあるはずはないのである。そうして、無きに如かざるの精神から、それはそれとして、とにかく一応有形の美に復帰しようとする



するならば、茶室的な不自然なる簡素を排して、人力の限りを尽した豪華、俗悪なるものの極点において開花を見ようとすることもまた自然であろう。簡素なるものも豪華なるものも共に俗悪であるとするれば、俗悪を否定せんとしてなお俗悪たらざるを得ぬ惨めさよりも、俗悪ならんとして俗悪である闊達自在さがむしろ取り柄だ。かつたつ

この精神を、僕は、秀吉において見る。いったい、秀吉という人は、芸術について、どの程度の理解や、観賞力があったのだろうか？　そうして、彼の命じた多方面の芸術に対して、どの程度の差し出口をしたのであろうか。

秀吉自身は工人ではなく、おのおのの個性を生かしたはずなのに、彼の命じた芸術には、実に一貫した性格があるのである。それは人工の極致、最大の豪華ということであり、その軌道にあるかぎりには清濁合わせ呑むの概がある。城を築けば、途方もない大きな石を持つてくる。三十三間堂の塀へいときては塀の中の巨人であるし、智積院ちじやくいんの屏風びょうぶときては、あの前にすわった秀吉が花の中の小猿のように見えたであろう。芸術も糞もないようである。一つの最も俗悪なる意志による企業なのだ。けれども、否定することのできない落ち着きがある。安定感がある

のである。

いわば、事実において、彼の精神は「天下者」であつたと言ふことができる。家康も天下を握つたが、彼の精神は天下者ではない。そうして、天下を握つた將軍たちは多いけれども、天下者の精神を持った人は、秀吉のみであつた。金閣寺も銀閣寺も、およそ天下者の精神からは縁の遠い所産である。いわば、金持ちの風流人の道樂であつた。

秀吉いっさいがっさいにおいては、風流も、道樂もない。彼の為す一切合財いっさいがっさいのものがすべて天下一でなければ納らない狂的

な意欲の表われがあるのみ。ためらいの跡がなく、一歩でも、控えてみたという形跡がない。天下の美女をみんなほしがり、くれない時には千利休せんりのりきゆうも殺してしまいう始末である。あらゆる駄々をこねることができた。そうして、実際、あらゆる駄々をこねた。そうして、駄々っ子のもつ不逞ふていな安定感というものが、天下者のスケールにおいて、彼の残した多くのものに一貫して開花している。ただ、天下者のスケールが、日本的に小さいという憾みうらみはある。そうして、あらゆる駄々をこねることができたけれども、しかもすべてを意のままにすることはできな

かったという天下者のニヒリズムをうかがうこともできるのである。だいたいにおいて、極点の華麗さには妙な悲しみがつきまとうものだが、秀吉の足跡にもそのようなものがあり、しかも端倪たんげいすべからざるところがある。

三十三間堂の太閤塀というものは、今、きわめて小部分しか残存していないが、三十三間堂とのシムメトリイなどというものはほとんど念頭にない作品だ。シムメトリイがあるとすれば、いたずらに巨大さと落ち着きを争っているようなもので、元来塀というものはその内側に建築あつて始めて成り立つはずであろうが、この塀ばかり

は独立自存、三十三間堂が眼中にないのだ。そうして、その独立自存の<sup>たくま</sup>逞しさと、落ち着きとは、三十三間堂の上にあるものである。そうして、その巨大さを不自然に見せないところの独自の曲線には、三十三間堂以上の美しさがある。

僕が亀岡へ行ったとき、王仁三郎は現代において、秀吉的な駄々っ子精神を、非常に突飛な形式ではあるけれども、とにかく具体化した人ではなからうかと想像し、夢の跡に多少の期待を持ったのだったが、これはスケールが言語道断に卑小にすぎで、ただ、直接に、俗悪その

ものでしかなかつた。全然、貧弱、貧困であつた。言うまでもなく、豪華きわまつて浸みでる哀愁のごときは、みじん微塵といえどもなかつたのである。

酒樽ありせば、帝王も我において何かあらんや、と、詠じ、靴くつとなつてあの娘の足に踏まれたい、と、歌う、万葉の詩人にも、アナクレオンのともがらにも、中国にも、ペルシヤにも、文化のある所、必ず、かかる詩人と、かかる思想があつたのである。しかしながら、かかる思想は退屈だ。帝王何かあらんや、どころではなく、生来帝王の天質がなく、帝王になつたところで、何一つ立派

なことのできる奴輩ではないのである。

俗なる人は俗に、小なる人は小に、俗なるまま小なるままのおのおのの悲願を、まっとうに生きる姿がなつかしい。芸術もまたそうである。まっとうでなければならぬ。寺があつて、後に、坊主があるのでなく、坊主があつて、寺があるのだ。寺がなくとも、良寛は存在する。もし、我々に仏教が必要なならば、それは坊主が必要なので、寺が必要なのではないのである。京都や奈良の古い寺がみんな焼けても、日本の伝統は微動もしない。日本の建築すら、微動もしない。必要なならば、新らたに造れ



ばいいのである。バラックで、結構だ。

京都や奈良の寺々は大同小異、深く記憶にも残らないが、今もなお、車折神社の石の冷たさは僕の手に残り、伏見いなり稻荷の俗悪極まる赤い鳥居の一里に余るトンネルを忘れることができない。見るからに醜悪で、てんで美しくはないのだが、人の悲願と結びつくとき、まっとうに胸を打つものがあるのである。これは、「無きに如かざる」ものではなく、そのあり方が卑小俗悪であるにしても、なければならぬ物であった。そうして、龍安寺の石庭で休息したいとは思わないが、嵐山劇場のインチキ・

レビュウを眺めながら物思いに耽<sup>ふけ</sup>りたいとは時に思う。人間は、ただ、人間をのみ恋す。人間のない芸術など、あるはずがない。郷愁のない木立の下で休息しようとは思わないのだ。

僕は「檜垣<sup>ひがき</sup>」を世界一流の文学だと思っているが、能の舞台を見たいとは思わない。もう我々には直接連絡しないような表現や唄<sup>うた</sup>い方を、退屈しながら、せめて一粒の砂金を待って辛抱するのが堪えられぬからだ。舞台は僕が想像し、僕がつくれば、それでいい。天才世<sup>ぜ</sup>阿<sup>あ</sup>弥<sup>み</sup>は永遠に新ただけけれども、能の舞台や唄<sup>うた</sup>い方や表現形式が

永遠に新たかどうかは疑しい。古いもの、退屈なものは、亡びるか、生まれ変わるのが当然だ。

### 三 家について

僕はもう、この十年来、たいがい一人で住んでいる。東京のあの街やこの街にも一人で住み、京都でも、茨城県の取手とりでという小さな町でも、小田原でも、一人で住んでいた。ところが、家というものは（部屋でもいいが）

たった一人で住んでいても、いつも悔いがつきまとう。

しばらく家をあけ、外で酒を飲んだり女に戯れたり、時には、ただ何も無い旅先から帰って来たりする。すると、必ず、悔いがある。叱る母もいないし、怒る女房も子供もない。隣の人に挨拶あいさつすることすら、いらぬ生活なのである。それでいて、家へ帰る、という時には、いつも変な悲しさと、うしろめたさから逃げる事ができない。

帰る途中、友達の所へ寄る。そこでは、いっこうに、悲しさや、うしろめたさが、ないのである。そうして、

平々凡々と四、五人の友達の所をわたり歩き、家へ戻る。すると、やっぱり、悲しさ、うしろめたさが生れてくる。

「帰る」ということは、不思議な魔物だ。「帰ら」なければ、悔いも悲しさもないのである。「帰る」以上、女房も子供も、母もなくとも、どうしても、悔いと悲しさから逃げる事ができないのだ。帰るということの中には、必ず、ふりかえる魔物がいる。

この悔いや悲しさから逃れるためには、要するに、帰らなければいいのである。そうして、いつも、前進すればいい。ナポレオンは常に前進し、ロシヤまで、退却し

たことがなかった。けれども彼ほどの大天才でも、家を逃げることはできないはずだ。そうして、家がある以上は、必ず帰らなければならぬ。そうして、帰る以上は、やっぱり僕と同じような不思議な悔いと悲しさから逃げることはできないはずだ、と僕は考えているのである。だが、あの大天才は、僕とは別の鋼鉄だろうか。いや、別の鋼鉄だからなおさら……と、僕は考えているのだ。そうして、孤独の部屋で蒼あおざめた鋼鉄人の物思いについて考える。

叱る母もなく、怒る女房もないけれども、家へ帰る

と、叱られてしまう。人は孤独で誰に気がねのいらな  
生活の中でも、決して自由ではないのである。そうして、  
文学は、こういう所から生れてくるのだ、と僕は思っ  
ている。「自由を我等に」という活動写真がある。機械文  
明への諷刺ふうしであるらしい。毎日毎日日曜日で、社長も職  
工もなく、毎日釣りだの酒でも飲んで遊んで暮らしてい  
られたら、自由で楽しいだろうというのである。しかし、  
自由というものは、そんなに簡単なものじゃない。誰に  
気がねがいらなくとも、人は自由ではあり得ない。第一、  
毎日毎日、遊ぶことしかなければ、遊びに特殊性がなく

なつて、楽しくもなんともない。苦があつて楽があるの  
だが、樂ばかりになつてしまえば、世界じゆうがただ水  
だけになつたことと同じことで、樂の樂たるゆえんがな  
いだらう。人は必ず死ぬ。死があるがために、喜怒哀樂  
もあるのだらうが、いつまでたつても死なないときまつ  
たら、退屈千万な話である。生きていることに、特別の  
意義がないからである。

「自由を我等に」という活動写真の馬鹿らしさはどうで  
もいいが、ルネ・クレールはとにかくとして、社会改良  
家などと言われる人の自由に対する認識が、やっぱりこ



れと五十歩百歩の思いつきにすぎないことを考えると、文学への信用を深くせずにはいられない。僕は文学万能だ。なぜなら、文学というものは、叱る母がなく、怒る女房がいなくとも、帰ってくると叱られる。そういう所から出発しているからである。だから、文学を信用することができなくなったら、人間を信用することができないうという考えでもある。

#### 四 美について

三年前に取手という町に住んでいた。利根川に沿うた小さな町で、トンカツ屋とソバ屋のほかには食堂がなく、僕は毎日トンカツを食い、半年めにはついに全くうんざりしたが、僕はたいがい一ヶ月に二回ずつ東京へでて、酔っ払って帰る習慣であつた。もつとも、町にも酒屋はある。しかし、オデン屋というようなものはなく、普通の酒屋で、かまち 框へ腰かけてコップ酒をのむのである。こ

れを「トンパチ」と言い、「当八」の意だそうである。すなわち一升がコップ八杯にしか当らぬ。つまり、一合以上なみなみとあり、盛りがいいという意味なのである。村の百姓たちは「トンパチやんべいか」と言う。もちろん僕は愛用したが、一杯十五銭だったり十七銭だったり、日によってその時の仕入れ値段でまちまちだったが、東京から来る友達は顔をしかめて飲んでいる。

この町から上野まで五十六分しかかからぬのだが、利根川、江戸川、荒川という三ツの大きな川を越え、その一つの川岸に小菅<sup>こすげ</sup>刑務所があった。汽車はこの大きな近

代風の建築物を眺めて走るのである。非常に高いコンクリートの塀がそびえ、獄舎は堂々と翼を張って十字の形にひろがり、十字の中心交叉点こうさに大工場の煙突よりも高々とデコボコの見張りの塔が突っ立っている。

もちろん、この大建築物には一カ所の美的装飾というものもなく、どこから見ても刑務所然としており、刑務所以外の何物でもあり得ない構えなのだが、不思議に心を惹ひかれる眺めである。

それは刑務所の観念と結びつき、その威圧的なもので僕の心に迫るのとは様子が違う。むしろ、懐なつかしいよう

な気持である。つまり、結局、どこかしら、その美しさで僕の心を惹いているのだ。利根川の風景も、手賀沼も、この刑務所ほど僕の心を惹くことがなかった。

いったい、ほんとに美しいのかしら、と、僕は時々考えた。

これに似た他の経験が、もう一つ、ハッキリ心に残っている。

もう、十数年の昔になる。そのころはまだ学生で、僕は酒も飲まない時だが、友人たちと始めて同人雑誌をだし、酒を飲まないから、勢い、そぞろ歩きをしながら五

時間六時間と議論をつづけることになる。そのため、足の向くままに、実に諸方の道を歩いた。深夜になり、深夜でなくともしきりと警官に訊問じんもんされたが、左翼運動のさかんな時代で、徹底的に小うるさく訊問された。だいたい、深夜に数人で歩きながら、酒も飲んでいないというのが、かえって怪しまれる種であった。そういう次第で心を改め大酒飲みになった訳でもないのだが。

銀座から築地へ歩き、渡船に乗り、佃つくだじま島へ渡ること  
が、よくあった。この渡船は終夜運転だから、帰れなくなる心配はない。佃島は一問ぐらいの暗くて細い道の両

側に「佃茂」だの「佃一」だのという家が並び、佃煮屋  
かも知れないが、漁村の感じで、渡船を降りると、突然  
遠い旅に来たような気持になる。とても川向うが銀座だ  
とは思われぬ。こんな旅の感じが好きであつたが、ひと  
つには、聖路せいりるか加病院の近所にドライアイスの工場があつ  
て、そこに雑誌の同人が勤めていたため、この方面へ足  
の向く機会が多かつたのである。

さて、ドライアイスの工場だが、これが奇妙に僕の心  
を惹くのであつた。

工場地帯では変哲もない建物であるかも知れぬ。起重

機だのレールのようなものがあり、右も左もコンクリートで頭上のはるか高い所にも、倉庫からつづいてくる高架レールのようなものが飛び出し、ここにもいつさいの美的考慮というものがなく、ただ必要に応じた設備だけで一つの建築が成り立っている。町家の中でこれを見ると、魁<sup>かゝい</sup>偉であり、異観であったが、しかし、ずぬけて美しいことがわかるのだった。

聖路加病院の堂々たる大建築。それに較<sup>くら</sup>べればあまり小さく、貧困な構えであったが、それにもかかわらず、この工場の緊密な質量感に較べれば、聖路加病院は子供



たちの細工のようなたあいもない物であった。この工場は僕の胸に食い入り、はるか郷愁につづいて行く大らかな美しさがあつた。

小菅刑務所とドライアイスの工場。この二つの関聯について、僕はふと思うことがあつたけれども、そのどちらにも、僕の郷愁をゆりうごかす<sup>たくま</sup>逞しい美感があるという以外には、強<sup>し</sup>いて考えてみたことがなかつた。法隆寺だの平等院の美しさとは全然違ふ。しかも、法隆寺だの平等院は、古代とか歴史というものを念頭に入れ、一応、何か納得しなければならぬような美しさである。直

接心に突き当り、はらわたに食い込んでくるものではない。どこかしら物足りなさを補わなければ、納得するところがないのである。小菅刑務所とドライアイスの工場は、もっと直接突き当り、補う何物もなく、僕の心をすぐ郷愁へ導いて行く力があつた。なぜだろう、ということ、僕は考えずにいたのである。

ある春先、半島の尖端の港町へ旅行にでかけた。その小さな入江の中に、わが帝国の無敵駆逐艦が休んでいた。それは小さな、何か謙虚な感じをさせる軍艦であつたけれども一見したばかりで、その美しさは僕の魂をゆりう

ごかした。僕は浜辺に休み、水にうかぶ黒い謙虚な鉄塊を飽かず眺めつづけ、そうして、小菅刑務所とドライアイスの工場と軍艦と、この三つのものを一にして、その美しさの正体を思いだしていたのであった。

この三つのものが、なぜ、かくも美しいか。ここには、美しくするため加工した美しさが、いつさいない。美というものの立場から付け加えた一本の柱も鋼鉄もなく、美しくないという理由によって取りった一本の柱も鋼鉄もない。ただ必要なもののみが、必要な場所に置かれた。そうして、不要なる物はすべて除かれ、必要のみ

が要求する独自の形ができ上っているのである。それは、それ自身に似るほかには、他の何物にも似ていない形である。必要によつて柱は遠慮なく歪められ、鋼鉄はデコボコに張りめぐらされ、レールは突然頭上から飛び出してくる。すべては、ただ、必要ということだ。そのほかのどのような旧来の觀念も、この必要のやむべからざる生成をはばむ力とは成り得なかつた。そうして、ここに、何物にも似ない三つのものができ上つたのである。

僕の仕事である文学が、全く、それと同じことだ。美しく見せるための一行があつてもならぬ。美は、特に美

を意識してなされた所からは生れてこない。どうしても書かねばならぬこと、書く必要のあること、ただ、そのやむべからざる必要にのみ応じて、書きつくされなければならぬ。ただ「必要」であり、一も二も百も、終始一貫ただ「必要」のみ。そうして、この「やむべからざる実質」がもとめたところの独自の形態が、美を生むのだ。実質からの要求をはずれ、美的とか詩的という立場に立って一本の柱を立てても、それは、もう、たわいもない細工物になってしまう。これが、散文の精神であり、小説の真骨頂である。そうして、同時に、あらゆる芸術の

大道なのだ。

問題は、汝の書こうとしたことが、真に必要なことであるか、ということだ。汝の生命と引き換えにしても、それを表現せずにはやみがたいところの汝みずからの宝石であるか、どうか、ということだ。そうして、それが、その要求に応じて、汝の独自なる手により、不要なる物を取り去り、真に適切に表現されているかどうか、ということだ。

百メートルを疾走するオウエンスの美しさと二流選手の動きには、必要に応じた完全なる動きの美しさと、応

じ切れないギゴチなさの相違がある。僕が中学生のころ、百メートルの選手といえは、瘦やせて、軽くて、足が長くて、スマートの身体でなければならぬときまっていた。ふとった重い男はもっぱら投擲とうてきの方へ廻され、フィールドの片隅で砲丸を担かついだりハンマーを振り廻していたのである。日本へも来たことのあるパドックだのシムプソンのころまでは、そうだった。メトカルフだのトーランが現われたころから、短距離には重い身体の加速度が最後の条件であると訂正され、スマートな身体は中距離の方へ廻されるようになったのである。いつか、羽田飛行

場へでかけて、分捕品のイー十六型戦闘機を見たが、飛行場の左端に姿を現わしたかと思ううちに右端へ飛び去り、呆れ果てた速力であつた。<sup>あき</sup>かつての日本の戦闘機は格闘性に重点を置き、速力を二の次にするから、速さの点では比較にならない。イー十六は胴体が短く、ずんぐり太っていて、ドツシリした重量感があり、近代式の百メートル選手の体格の条件に全くよく当てはまっているのである。スマートな所は微塵もなく、あくまで不恰好にでき上っているが、その重量の加速度によって風を切る速力的な美しさは、スマートな旅客機などの比較にな



らぬものがあつた。

見たところのスマートだけでは、真に美なる物とはなり得ない。すべては、実質の問題だ。美しさのための美しさは素直でなく、結局、本当の物ではないのである。

要するに、空虚なのだ。そうして、空虚なものは、その真実のものによって人を打つことは決してなく、詮詮ずるところ、あつてもなくても構わない代物である。しろもの法隆寺も平等院も焼けてしまつていっこうに困らぬ。必要ならば、法隆寺をとり壊して停車場をつくるがいい。我が民族の光輝ある文化や伝統は、そのことによつて決して亡

びはしないのである。武蔵野の静かな落日はなくなつたが累々たるバラツクの屋根に夕陽が落ち、埃ほこりのために晴れた日も曇り、月夜の景観に代わつてネオン・サインが光っている。ここに我々の実際の生活が魂を下ろしているかぎり、これが美しくなくて、何であろうか。見たまえ、空には飛行機がとび海には鋼鉄が走り、高架線を電車が轟々ごうごうと駈けて行く。我々の生活が健康であるかぎり、西洋風の安直なバラツクを模倣して得々としても、我々の文化は健康だ。我々の伝統も健康だ。必要ならば公園をひっくり返して菜園にせよ。それが真に必要ななら

ば、必ずそこにも真の美が生れる。そこに真実の生活があるからだ。そうして、真に生活するかぎり、猿真似を差はじることではないのである。それが真実の生活であるかぎり、猿真似にも、独創と同一の優越があるのである。



日本文学電子図書館

---

墮落論

著 者：坂口安吾

制作者：宮澤一郎

出版社：角川文庫、角川書店  
昭和45年1月30日 改版3刷

---



日本文学電子図書館